

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

### 5.裸のマハ

#### 5-1

いつもと違う昌幸の口振りに、真紀は「わかりました」と答えるしかなかった。

「恩に着るよ。五反田についたら地下鉄に乗り換えるから、店には一時間後位になると思うけど、いいかな？」

「間に合わせるわ」

「真紀……」

瞬時、沈黙があった。

「はい？」と真紀は部屋着を脱ぎながら聞き返した。

「愛してるよ」

「……」

「君に会えて本当によかった」

「昌幸さん、何かあったのね？」

「いつもと同じさ。言っちゃ悪いのかい？」

「いいえ、とても嬉しいわ」

「ありがとう」

奇しくもこれが、昌幸と真紀の最後の会話となった。

その日、二人でランチを済ませた後、真紀は五反田まで昌幸を送り届けると、東京都庁と対峙する「新宿パークタワー」へ車を走らせた。

昌幸には、昔お世話になった人と会うと伝えておいたが、実は、ひと頃愛憎劇を演じた日本画家の横田の代理人であり画商でもある朝倉が約束の相手だった。

新宿パークタワーは超高層ビル群の一角にあり、映画『パッドマン』に登場しそうな三角屋根の外貌が目印となっている。三十七階までがオフィスをはじめとするショップや多目的ホールで、三十九階から五十二階までを「パークハイアットホテル」が運営している複合ビルである。

四十一階にある「ピークラウンジ」の全面ガラス張りになっている窓側の席で、すぐにそれとわかる風貌の朝倉が立ち上がって真紀を迎えた。

「お呼び立てして申し訳ない」

「ご無沙汰しております」

「ちっとも変わりませんね……」

朝倉はまぶしげに真紀を見つめた。

ガラス窓に午後の自然光が注ぎこむラウンジからは、眼下に広がる新宿の街並みが観望できた。

黒のスキニーパンツと黒のトップス、浅緑の極太ベルトでウエストを絞り、黒のロングブーツを履いた真紀の優艶な見目形は、大きな仕掛けの中にあっても際立っていた。

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

### 5-2

「新宿は何年ぶりかしら。この辺りもすっかり変わってしまって……」

「すると、このホテルは？」

「初めてです」

「そうでしたか、それは失礼しました。ここのアフターヌーンティーはお勧めですよ？」

「いただきます」

朝倉はウエイターを呼んだ。

朝倉は三段重ねのティースタンドの一段目のプレートに盛り合わされた季節のケーキの中から真紀の好みを聞くと、太く短い指を器用に使って小皿に取り分けてよこした。

「ありがとうございます」と真紀は礼を言ってから、ミルクティーを一口飲んだ。

「横田の個展の事です」と朝倉はいきなり核心に触れた。

「電話でお話ししたように、この建物の十五階にあるギャラリーで来月から開きます」

朝倉は真紀の反応を窺っていた。

「はい。それで私に何を？」

「ほかでもないのですが……」と朝倉は言い淀むと、わざとがましく重々しい口調で「あなたの裸婦像も展示させて頂ければと思っていまして……」とポテツとした小鼻をビクつかせて打ち明かした。

「え？」と聞き直した真紀は、ソーサーにのせたティーカップをテーブルに置いた。

「横田の意向でもあります」

「……」啞然とする真紀を横目に、「私が彼と独占契約を結んでいることはご存知でしたね？」と朝倉は、用意されていた方便のように聞いた。

「電話では話せないことだからとおっしゃったのは、そのことでしたか」

真紀はあからさまに嫌味で返答した。

「デリケートな問題ですから」

「卑怯だわ。私の気持ちは、とうに分かっていたはずですよ」

真紀は怒りを鎮めるように、ビル群の先にあるスカイラインに視線を移していた。

「身も蓋もないなあ！」と朝倉は赤みのさしたたるんだ頬で抗弁して、「ここは私の顔を立ててくれませんか」と泣き言を漏らした。

「これで失礼します」

真紀は眉根を寄せると、席を立ちあがろうとした。

「待ってください」と朝倉はうろたえ気味に制してから、「実は、横田の懐具合がSOSでして」と浮き腰で切り出した。

坐り直した真紀の頬から血の気が引いていく様に、「ニッチモサッチモ行かない状況なのです」と朝倉は許しを乞うように、空咳をして取り繕った。

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

### 5-3

真紀は横田の浪費癖にまつわるいくつかのトラブルについて思い返していた。

「彼の才能を高く評価していたあなたなら分かって頂けるのではないかと思います」

朝倉は青臭いことを言うと、口角を少し広げて微笑もうとしたが、実際には自嘲気味に強張った表情になっていた。

「何ですか？今さら……。朝倉さんらしくないわ」と真紀は不快感をあらわにした。

「裸婦像は、お手元にあるのですか？」

朝倉は真紀の反応を無視して訊ねた。

「裸婦像？」と真紀は顔を歪めて反復した。

「あなたを描いた百二十号のあれです」

朝倉は真紀の口もとを、細めた目でなぞるようにしてデジタルな声で言った。

午後の陽光がたゆたう四十一階の広やかなパブリックスペースの一角に、茶葉が開く加減の時間が刻まれる中で、BGMはブラームスのヴァイオリンソナタ第一番【雨の歌】が流れていた。

真紀はホテルのサービススタッフの応対する低い声や、他のお客が使うデザートフォークの微音までも聞き分けることができた。

「話の持っていく方が下手で、大変申し訳ない」と朝倉は弱り果てた顔で弁解をした。

ヴァイオリンソナタは抒情と哀愁が入り交じる第二楽章へと移っていた。

「さっき、横田さんも同意なさっていると仰いましたが、裸婦像をどうするおつもりですか？」

真紀は画家の名前を口にする事に違和感を覚えながらも、そこには数々の不条理を乗り切ってきた一流クラブのママとしての自負心がうかがえた。

朝倉は所望の絵画を競り合っている時と同じようなアドレナリンの分泌を体感して、喉に渴きを覚えていた。

「横田を呼びましょうか？今、下のギャラリーにいます」と朝倉は口を滑らせた。

BGMはピアノが奏する民謡風のメロディーにヴァイオリンが寄りそってペーソスを漂わせていた。「この人にもブラームスは聴こえているのかしら」と真紀は朝倉の心を汲むほど冷静になっていた。

「プライドのかたまりのようなあの人が、今さら私に……。ですか？」

「あなたが彼の傍にいてくれたら、こうはならなかったと思います」

まるでブラームスに不協和音を生じさせるかのように、朝倉は唐突に言った。

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

### 5-4

「まあ、何か変よ?変ですよ。私の知っている朝倉さんではないわ。紳士の匂いが消えてしまっている?」

真紀はわざと語尾を伸ばして言った。

BGMのヴァイオリンソナタは第三楽章までの約27分の演奏時間が終わり、同じ作曲家の【二つのラプソディ】が流れていた。

朝倉の頬に、また赤みがさしていた。プライドをそぎ落とされた男は口を歪めて、しばらく目を閉じていた。そしておもむろに気持ちと裏腹とわかる穏やかな作り声で言った。

「私の持ち出しも数千万を超えましてね。このままほうっておくと、今度ばかりは、横田もメディアの餌食になるだけではすまないでしょう」

真紀はじっと朝倉を見ていた。画商の肩口に心労が漂っている。間違いなく手詰まりになっている素振りだと思った。

「わかりました」

真紀は迂闊にも前のめりに言っていた。言ってしまってから、相手の調子につられた自身の甘さに気づいた。それでもブラームスのピアノ独奏曲を聴き取ることができた。

真紀は横田と過ごした日々の中から甘美な記憶の断片を引き寄せて、ピアノの旋律にのせると続けて言った。

「私にお役にたてることがあれば、協力したいと思います」

朝倉は、さながら駄々をこねて、欲しい玩具を母親から買ってもらった時の子供のような面持ちを見せた。

「恩に着ます。詳しい話はギャラリーへ行ってからにしませんか?」

「待って……、ここで話しして」

「会ってやってくれませんか?」

「気まずい思いをするだけです」

真紀は唇を噛んで朝倉を睨んだ。

「今の横田は見る影もないです。口には出ませんが、あなたに会いたがっています。ここに来るように伝えます」

朝倉は急いで胸ポケットから携帯電話を取り出した。

「どうなっても知りませんよ」

真紀の本気度に一瞬怯んだ朝倉は体をこわばらせて、次の動作を止めた。

真紀は『こはる』の顧客で落魄した同類の男を何人か見てきたが、ハリウッド映画のワンシーンのように四十一階の場面設定で登場するとは思ってもよらなかった。

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-5

【二つのラプソディ】は17分の演奏を終えていた。真紀がこんなにもBGMを意識したのは初めてのことだった。ブラームスの後には、聞き覚えのあるシャンソンがジャズギター風の演奏で流れてきた。真紀はギタリストの『ジャンゴ・ラインハルト』を知らなかったが、ありがたいことに心身の疲弊はラウンジの選曲に救われていた。

だだっ広い空間で沈黙を保つのは容易ではなかったけれど、真紀は朝倉の次の言葉を待っていた。

携帯電話を閉じた朝倉は、何を思ったのか傍らのカバンからノートパソコンを取り出して、小さく息を吐くと眉間にしわを寄せてキーボードを静かに叩き始めた。

「何度見ても素晴らしい！」

朝倉はディスプレイの裸婦像と目の前にいる真紀とを見比べながらニンマリする。

「提案させていただいた絵です。ご覧になりますか？」

今度の目論見が間違いなかったことを、絵画のモデルを前に切り札を出すかのごとく、見てくれるのが当然とばかりにパソコンの向きを変えようとした。

「やめてください。協力すると申し上げたはずです」

ハリウッド映画だったら、ここでワインでも相手の顔にぶっ掛けて立ち去るシーンになるかもしれないが、真紀は同様の気分を何とか抑えて辛抱強く言った。

機先を制された画商は、きまり悪そうに視線をディスプレイに泳がせた。

「個展のポイントを、かいつまんで話してください」

悔しさと悲しみとがない交ぜになって、すぐにでもこの場を立ち去りたがったが、真紀の人の良さがそれを押しとどめていた。

「僕は呼んでいませんからね……」

朝倉は真紀の肩越しの先に、こちらに歩いてくる横田を認めると、慌てて弁明した。

今何が起きているのか、直ぐに察知した真紀は、背筋に悪寒が走って振り返ることすらできずにいた。

別段悪びれた風もない横田は、二人が蜜月の頃、よく待ち合わせ場所として利用した『帝国ホテル本館中二階オールドインペリアルバー』と同様に、真紀の前にふわりと対座した。

「……」「……」

男と女は無言のまま向き合っていた。

女は男の風貌も心も、以前と変わっていないと思っていた。

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-6

「裸婦像の件、協力していただけるそうだ。君からもお礼を言っておいてくれ」

いろいろと策を弄したことが功を奏しているにもかかわらず、朝倉は空喜びになるのが怖くて、わざと拍子抜けしたように言った。

いつ頼んだのか、ウェイターがジントニックを横田にサーブした。

「この人が、裸婦像を個展の目玉にすると聞いて聞かないのだ」と横田は嘯いた。

「同意なさったのでしょうか？」

画家の落ちぶれた風体を、気持ちのどこかで期待していた真紀は、それがもの見事に裏切られた所為もあって、自嘲の笑みをもらして訊ねた。

「どうもこうもないさ。知っての通りだよ」

と横田は答えてから、グラスの中のライムをマドラーで潰して攪拌した。

「落ちぶれた、落ちぶれたと聞かされて、もう少しで信じてしまうところでした。ねえ、朝倉さん！」

真紀は横田を見ないようにして、朝倉に精一杯の皮肉を込めて言った。

まんまと朝倉の術中にはまってしまった真紀ではあったが、正直なところ、悔しさよりも、どこにも逃げ場のない滑稽さのほうが勝っていた。

それでも真紀は、無感動な顔でジントニックをかたむける横田を意識しないわけにはいかなかった。

「朝倉さん、ご要望通りにいたしますが、一つだけ条件があります」

「なんでしょうか？」

朝倉は不安げに、横田と真紀を見比べながら聞き返した。

「裸婦像の存在を知っているのは、私たちだけですか？」

朝倉は問いかけに、沈黙で否定する。

「そうですね。パソコンに取り込んでいるくらいですから」

真紀は相手の想定内の反応を確かめるように言った。

横田と真紀のスキャンダルがメディアに曝された時、特化した恰好の餌食になったに違いない裸婦像を極秘裏にしておくことができたのは、愛憎劇の渦中であっても、男と女と言うよりは、画家とモデルとしての結実した作品の力が有無を言わせず働いたからに他ならなかった。

この先、裸婦像の存在が知られることになったとしても、絵画の価値が上がることはあっても下がることはないことを三人とも先見していた。

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

### 5-7

『こはる』の顧客の中には、俗にアーティストと呼ばれる人種も少なからずいた。

彼らには、極端に内向きタイプと厭になるくらい露呈好きなタイプがいて、お金にシビアか、まったく無頓着かに大別された。

どちらにしても、面倒くさくて手に余る人種に違いなかった。

横田が頼めば、高級画廊でも高額な前借をさせたので、その付けが現況であることは真紀にも容易に想定できた。

横田の才能に惚れこんで、借財の肩代わりまでして専属契約を結ばせた朝倉にしてみれば、今度の企画は、どうしても成功させなければならなかった。

詰まる所、真紀も横田も朝倉の一人芝居に付き合わされているにすぎなかった。

そこで、朝倉が異常なほどに執着している裸婦像とは、真紀と横田の蜜月時代に、ベッドの上で枕に横たわる真紀の裸像一点と真紀の裸にシルクの友禅薄絹の長襦袢を纏わせた一点の二作品を横田が97 cm×190 cmのキャンパスに描いた日本画のことである。

横田がアトリエ代わりに借りていたマンションは地下鉄銀座線の上野広小路駅(松坂屋前)で降りて、北へ徒歩数分の所にあり、中二階には、小型キッチンユニットと二十八本収納できるワインセラーとバスルームとセミダブルのベッドが備えられていたので、人知れず忍びあうには好都合であった。

横田はバルコニーから適度な採光が取れる33㎡程のアトリエを、天然岩絵の具の風合いを見て取れるのと空間の使い勝手が気に入っていた。

当時、ワインセラーにストックされていた一ダース買ったカリフォルニア州ナパ・ヴァレー産の赤ワイン オーパス・ワン 1990年を、半月足らずの内に二人で飲み切ってしまった。

いつの時代でも分別盛りのいい女が危険な男に惑わされるのは、互いにそれ相応の魅力があるからで、よんどころない必然の流れなのかもしれない。

出勤前に真紀は季節感や気分によって着物を選び、着付けを自分でしてから、必ず行きつけの美容室で、いつもと変わらない髪型にセットしてもらっていたのだが、横田とそんな関係の時は、ルーティーンを変えざるをえないことが生じたりした。

開店前の点呼、予約状況の確認、注意事項なども、どこかでなおざりになっていた。

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-8

銀座の高級クラブは、席料だけで一人平均二万五千円かかる。顧客には一流企業のトップから各業界の著名人などが多い。

利用者の動向は敏感に景気を察知して、日本経済の現状を映す鏡でもあった。

ホステスの中から選ばれた者だけが、雇われママではなく独立して経営者となるが、リーマンショック以降、千五百軒程に半減したクラブの中で、本人の資金で経営しているオーナーママは百五十人にも満たない。

オープン二ヶ月足らずで閉店するケースもざらにある。どんな有名店であれ、少しの油断が閉店に繋がるシビアな世界だ。

百五十人のうちの一人の真紀にしても、毎年、年賀状を五千枚ほど書くシバレンタインデーには同数のチョコレートを送っている。

異性との程よい距離感を保つセンスに長けていた真紀が横田に血道を上げたのは、それ相応の男だったからで、醜聞が立った時、真紀はこれで店も終わりだと覚悟した。

ところが、皮肉なことに日本画界における横田一村の画業の評判の高さはもとより、その破天荒な生き様が、勝ち組の男たちにとって、憧憬と嫉妬と侮蔑がないまぜになって、いわく言い難い極上の好奇心をそそり、何年かぶりのお客まで来店するようになった。

産まず女と噂された真紀にも、妊娠中絶の経験がある。

ホステスのアルバイトをしながら大学卒業間際の相手は大手水産会社の営業部長で、望まれない妊娠であった。

手術後の経過が思わしくなく、産めない体になった。

銀座の水が合っていたのか、住み着くよりほかなかったのか、立ち直ってから五年後の二十八歳の時に、自己資金でお店を持つことができた。これは希有な事例と言えた。

ナンバーワンになれたホストは、何をやっても成功すると見なされるように、ホステスも然りである。

当たり前のことだが、高級クラブの店格は客層で決まる。

クラブ『こはる』には、一日平均八十人近い客が来店する。居心地の良さは勿論のことだが、えもいわれぬ真紀の男心を魅惑する力やオーラに客が客を呼んだ。

ホステス達にノルマを課さない方針も好結果に結びついた。

男女関係を迫られる事もあったが、真紀は本能的に自然体でかわす術を心得ていた。

それでも体が乾いて悲鳴をあげているときは、縁さえあれば抱かれない男に抱かれた。



## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-9

真紀は生来のいい女だった。

惚れっぽい女ではなかったが、深入りした男を忘れるために、新たな恋を求める性癖があった。それは都合のいいことに、仕事柄、容易に可能だった。

真紀は常連客のハードボイルド作家に、ママはアントンチェーフの短編小説『可愛い女』に出てくる主人公みたいだね。良く言えば、恋にストレートでピュアなんだよと揶揄されたことがある。

真紀はその短編を読んだこともあったし、『銀座博品館劇場』で舞台を観た記憶もあったので、さすがに作家の先生は上手いことをおっしゃると得心した。

大御所俳優に連れてこられた横田を初見した時も、『マーテル コルドンブルー』の水割りを供しながら、真紀は心が揺り動かされる独白の符号「あっ！」で、確信予想した。

「ママ、ジントニックをプレス・スタイルでもらえますか？」と横田はコニャックの水割りを一気に飲み干してから言った。

プレス・スタイルとは、特に欧米の報道機関の関係者がプレスビディアン・スタイルを言い換えたカクテルの処方で、従来はジンをトニックウォーターで割ってからライムを絞るのだが、トニックウォーターの甘みを緩和するために、トニックウォーターを半分にして、同量のソーダ水を加える飲み方なので、銀座の一流クラブといえども、当たり前で作れる知識を持ち合わせている店は稀である。

「プレス・スタイルですね。かしこまりました」と真紀は微笑むと、ボーイを呼んで耳打ちをした。

「好きなものを飲みなさい」

六十代の男優は、同席したホステス二人と真紀に勧めてから、横田が、いかにすごい日本画家なのかを吹聴した。

所在なげにしていた横田は、運ばれてきたジントニックを一口飲んで、満足げな表情を浮かべると、改めて店の格を値踏みでもするかのように、さらっと店内を見回した。

「貴女を描いてみたい」

横田は真紀をまっすぐに見つめると、唐突に言った。

「なんだなんだ！？突然!!お安くないね」

男優は苦み走った顔をほころばせると、身を乗り出して「横田画伯は本気ですよ！」と二人のホステスを証人に真紀を煽り立てた。

「ありがとうございます」と第三者が介入する余地をひと刷毛するかのように、真紀は少し間を置いてから横田を見据えて応えた。

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

### 5-10

横田には二度の離婚歴があったが、子供はいなかった。

横田に関する風聞は、あちこちから漏れ伝わってきたが、真紀の経験値が中和剤となって痴話喧嘩はあらかた回避された。ともあれ真紀は、ロシアの文豪が書いた『可愛い女』のような女なのだ。

裸婦像の話は睦言を交わしている最中に具象化された。

初対面で「貴女を描いてみたい」と直言された時には思いもよらなかった、ヌードになることを、真紀は今、何のてらいもなく受け入れることができた。

房事の前戯に日本画筆で遊ぶ性的嗜好が横田にはあった。画筆をセックスプレイに使うことは、彼に限らず、画業を生業とする者の中には少なからず存在するのかもしれない。横田は中二階のプライベートエリアで飛騨高山産の和ろうそくを三本灯すと、真紀の肉体がより一層、光と陰影で際立つ様に時間をかけて三台の燭台を配置した。

ベッドに横たわる真紀は、芸術家然としていないで、むしろ商社マンと言ったほうが似つかわしい横田の風貌を視界に収めつつ「可笑しな人……」ギャップの振幅を面白がる余裕が生まれていた。

横田は絵具や墨のボカシに使う唐刷毛を真紀の裸体に這わせながら、「貴女のプルンとしたお尻、腰の括れ、桃のような乳房、スレンダーな太股……、みんな肉体のキャンパスに溶かし込んでいこうよ」と小鼻を膨らませ、ろうそくの明かりに揺らぐ真紀の姿態を凝視しつつナルシスト気味に囁き、自己高揚バイアスをかける。

横田の習性に多少の寒々しさを覚えた真紀の心証を、男は画業の名声を博するだけの筆遣いで女の各々の肉体の稜線を絶妙なタッチで際立たせたかと思えば、絶頂寸前でぼかしていく美の極致に対する集中力は、均衡と落差が拮抗して起こすエネルギーを循環させることで一変させた。

寝物語が非日常的であればあるほど忘我の境に深入りする真紀の様相が横田の視聴覚を刺激し肥大化させた。

最高峰の唐刷毛と選ばれし画家が織りなすエロスは、鳥居清長の春画に肉薄する美体感を連想させた。かつて真紀がオーラル・セックスで味わったオーガズムとは異世界への扉であった。

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

### 5-11

横田はしばらく唐刷毛で淫楽に耽った後、『オーパス・ワン』が注がれたワイングラスに平筆を入れてたっぷり含ませると、真紀の陰部をなぞり始めた。

繊細で巧みな筆遊びに真紀が官能の疼き顔を見せる。「貴女だけ愉しむのは、けしからん」と横田はリーデルの大ぶりのワイングラスの縁に平筆をそっと置いて、「私も楽しませてもらうよ」とわざと尊大な口調で言って、わかめ酒もどきを興じ始めた。

真紀が官能の波にさらわれそうになると、彼は真紀の秘密の壺を噛み、瀬戸際で引き戻した。

それはまるで人体の細胞数は約三十七兆個と言われているが、そのうちの分化した何兆個かがオーガズムの扉を開けようとする変化のメカニズムを制御する術を横田が駆使しているかのようであった。

真紀は文句のつけようもない裸体を三本の蠟燭の揺れる火で浮き彫りにさせていた。

「意地悪ね……」と真紀は濡れた声で言う。

「完璧なフルボディだ！出来映えは想像以上だ！まるで裸のマハだ！」と横田は吠える。

「喉がカラカラ……。私にも飲ませて……」

真紀はベッドから半身を起しながら乾いた声で言った。

傍に置いてある絵筆掛けにワイングラスの縁に置いてあった平筆を戻した横田は、いそいそとカリフォルニア産の極上赤ワインを継ぎ足すと真紀に差し出した。

ワインをひと口含んで舌の上で転がしている真紀の姿態を、しばらく画家の眼で見ている横田は、おもむろに立ち上がると裸のままアトリエに下りていった。

真紀は横田が次にどんな手を打ってくるのか、いつもテーマがあって、その中でサーカスを見せていくシルク・ドゥ・ソレイユの出し物を期待して待っていた時と似たような気持ちで胸を高鳴らせていた。

階下のハイエンドオーディオからピアノ曲が程好い音量で流れ始めた。

男がこのタイミングでショパンの『バラード第一番』をかけるのは五年ぶりで、ワインとショパンとのマリージュを女性と試みるのは二度目である。一度目の女の名は城山聖子と言って、国立西洋美術館の学芸員をしていた。見た目は地味であったが、いくつもの浮名を流してきた男には、いつになく女の心根も体もいたく気に入っていた。ところが、女の夫が自殺未遂をしでかしたことで、二人の関係は一年足らずで終わった。

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

### 5-12

ショパンの豊穡な音楽性を内在して結実した作品『バラード第一番』は、極上ワインのオーパス・ワンの名前(音楽用語で作品番号第一番の意味で、一本のワインを交響曲に、一杯のワインをメロディーにと喩え、創業者のひとりが命名)の由来に、横田の強い思い入れをダブらせた選曲である。

ソナタの第一楽章の形式におおよそ基づいている『バラード第一番』は、舞曲風リズムの分散和音による第一主題、幅広い音域に寄り添い涼やかに彩られる明朗な第二主題により展開部に導入され、再現部は第二主題から始まりへと回帰して、モメントが刻々と差し迫るようにリフレインされたのち、八十八の鍵盤の左右をフルに使った見事なパッセージワークで九分三十秒の演奏を終える。

横田はお気に入りの女流ピアニスト仲道郁代の『バラード第一番』を背中で聴きながらロフトの階段を上っていった。

ベッドに横臥する真紀の悲しいほどにエロティックな姿態を改めて前にした横田は、反射的に創作意欲をかき立てられて、すぐにでも描いてみたいという強い衝動に駆られた。先ほど、ひどくのぼせ上って、「まるで裸のマハだ！」と賛美したことすら忘れていた。今まで何度となく女たちを、「貴女を描いてみたい」とエセ画家まがいの常套句で口説き落としてきたが、瓢箪から駒が出たことはついになかった。あの城山聖子さえもまた然りである。

無論のこと横田クラスになれば、画家とモデルとの間に、神話に近い深淵なる世界が介在しなければ、裸体を芸術的高みに押し上げることはできない位のことには修得しているはずだし、スピリチュアルメッセージをモチーフから受け取れる機会は、不遜かもしれないが、ごく限られて当然だと思う。

二百年ほど前のスペインの宮廷画家がアトリエ灯として用いていたと連想させても不思議ではない和ローソクの灯りに包まれた陰影が潜む異空間で、真紀は濃密な余韻に浸りながら、前触れもなく流れてきたピアノ曲に耳を傾けていた。期待通りの男の仕掛けに「やるじゃない……」と内心でつぶやいた。

上品でバランスが良く、力強さとフィネス(洗練)とストラクチャー(体躯)があり、口当たりと質感が優れているナパバレーワイン『オーパス・ワン』とショパンのピアノ曲『バラード第一番』とチャーホフの短編『可愛い女』とのトリプル共演が功を奏したのか横田の淫乱な眼差しは、手品師の華麗なカードさばきを見せられたように、画家の眼差しに変容していた。

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

### 5-13

「すまない、何もきかないで、しばらくそのままいてほしい」と横田は真紀に頼み込んでから、いつの間にか用意していた画帳を広げると、何かに取り憑かれたようにヌードデッサンを始めた。

高級クラブのママとして多種多様な人種を相手に立ち回ってきた真紀は、突拍子もない未経験のハプニングにも面食らったのは数分だけだった。

画家はポーズを指示することもなく、数枚のデッサンを一気に描き上げた。

その並はずれた集中力は、天性の希有な才能を彷彿とさせた。

「腹が減った……」と横田は、眼前に起こっている状況に臆することなく訴えた。

火照りの余韻が燻る裸体にレースガウンを羽織った真紀は、ロフトのこじんまりした水屋で夕食の残りのローストビーフと横田の朝食には欠かせないアルサスローレン上野松坂屋店のパリジャン(フランスパンの種類)でワサビ入りオニオンソースと香味野菜を使ってパリジャンサンドイッチを作った。

「イケるね！」と横田パリジャンサンドを頬張りながら言った。既にロフトには閨事の気配は霧消していた。

「まさかこんな感じでこうなるとは……」と真紀は声を揺らして言う前から、三本のローソクの火を吹き消すと、レースガウンを着けたままベッドに横たわる。

横田は杉皮和紙のスタンドライトをつけるとワインセラーの脇にある冷蔵庫からキリンビールが国内生産をしている350ミリリットルのバドワイザーを二缶取り出してきた。ベッドに横座りになってプルトップを開けた横田は、もう一缶を真紀に手渡してから、「こんな時は、なんとってビールだね！」と言って、喉を鳴らしてうまそうに飲んだ。

「裸を描くのは初めてなんだ」と画家はモデルに、照れくさそうに語りかける。

「旅の途中で放り出されたのは、私も初めてよ」とモデルはエスプリを利かせて応じた。

「この次は、間違いなく旅の終わりまで案内するよ」と画家は笑みを浮かべて返答する。

「ねえ、終わりまでは何本の筆を使うの？」モデルは冷笑の前触れを口元に隠し、第二弾のエスプリを利かせて尋ねた。

「かなわないなあ！今度は片手に三本持って楽しませてあげようじゃないか……」と画家は困ったふりをして大げさにぼやくと、軽くジャブを入れながら、レースガウンの上から女体に左手を這わした。

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

### 5-14

真紀は右手を絵描きの左手に絡ませて、レースガウンの下から胸元に引き寄せると、三文役者然とした品を作り、挑発的な眼差しを注いで尋ねた。

「ヌードを描くのは初めてとおっしゃったけど、何種類の筆を使うの？」

「描き始めてみないと……、まあ、八種類位は使うだろうね」と男は女の皮肉を意に介さず至極真面目な顔で答えた。

「完成するまで、私はどれくらい拘束されるのかしら？」

一時間ごとに十五分の休憩をはさみながら五時間程度を三日間拘束されたと言う話を、学生時代にヌードモデルのアルバイト経験を持つホステスから聞いた記憶を頼りに、真紀は自身のスケジュールに組み込む算段をどうつけたらいいのか不安になり、画家に確認した。

「今描かせてもらったラフデッサンを描き起こしてからじゃないと何んとも言えないが、この素描があれば、そんなに時間は取らせないよ。洋画家じゃないからね」と画家は無頓着な口調で答えると残りのサンドイッチを頬張り、バドワイザーを飲み干した。

画家としての才能と実績を理解しているつもりであっても、横田の言い分が胸に落ちるまでは多少の時間経過を要することを真紀は分かっていた。

「可能な限り協力させていただきます。込み入ったことは分かりませんが、素人にも五分の魂がありますから」と真紀は訴えた。

真紀は面食らった顔で首を傾げる横田を無視して、明日の月曜日からの予定を頭の中であれこれ整理する内に、そうしている自分が酷く滑稽に思えてきて、知らぬ間に、以前見たことがあるBS映画で放送された『日曜はダメよ』の主題歌を口ずさんでいた。

千九百六十年にギリシャで制作された白黒映画『日曜はダメよ』は、ギリシャの港町に住む娼婦と古代ギリシャ研究家のアメリカ人旅行者とが地域の人たちを巻き込んで織りなす物語で、主演女優のメリナ・メルクーリが歌った明るく軽快でコミカルな曲調の主題歌はアカデミー歌曲賞を獲得した。

日曜だけは仕事を休んで、気に入った男たちを呼んでドンチャン騒ぎをする娼婦と覚えやすい主題歌とが、真紀の記憶の底に印象深く刻まれていたのか、おぼろげながらも、主題歌をそらんじて歌うことができた。

唐突に鼻歌まじりに口ずさむ女の真意を測りかねる男は、それでも聞き覚えのある曲名を思い出そうとしていた。

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-15

横田の記憶の回路を惑わすように、

「ケセラセラ……、なるようになる！！、どん詰まりになった時の私の座右の銘なの。アルフレッド・ヒッチコック監督の映画『知りすぎていた男』の主題歌で、主演女優で歌手でもあるドリス・デイが誘拐された息子のために歌うのが『ケセラセラ』なの。この言葉の持つ力に何度救われたことか……」と真紀はおどけた顔で、続けざまに異なる仕様で映画音楽を二曲披露した。

真紀からケセラセラのフレーズを聞かされたことが引き金になり、横田は『日曜はダメよ』の曲調を思い出すことができたことで、

「二つの歌が僕の中では、どうやっても繋がらないよ」と不満げな顔で言った。

真紀にはそれ相応の道理があつたけれど、

「旅の途中で迷子にされた女の世迷い歌よ。でも、『日曜はダメよ』の五年前に『ケセラセラ』もアカデミー歌曲賞を受賞しているから、どこかで繋がらないかしら」と、今また女はエスプリを利かせたつもりで言って、微笑んだ。

男は内心、厄介な女と深入りしてしまったと狼狽したが、色相環で互いを引き立て合う補色関係より、反対色関係の色と色を対比させたほうが美しさで際立つのではないか、例えばヨハネス・フェルメールの『真珠の耳飾りの少女』の青と黄色のようにと、いかにも画家らしい理屈で気を晴らした。

色情がまったく失せてしまった二人は、シャワーを浴びると、横田が注意深く淹れた中深煎りのスマトラ・マンデリンのドリップコーヒーのカップをソーサーごと手に持ち、ベリー系やハーブの風味、スパイシーなフレーバーをゆっくりと味わいながら飲んだ。

「貴女の裸婦像を二点描こうと思っている」

横田は自分で決めた選択を、真紀の顔を正視しながら言った。

なぜ二点描くのか、横田の真意を汲み取れない真紀は、濡れたロングヘアをタオルに巻いた恰好で、コーヒーの苦味を味方につけて黙って話の続きを待っていた。

「何か？」と横田はくぐもった声で訊いた。

「二つの絵を描く理由を教えてください」

これくらいのことでは説明してくれて当然だと思いながら、真紀は語勢を強めて言った。

描きたいと逸る心の高ぶりが言葉足らずになって、相手に不信感を抱かせてしまっていると察知した横田は、今後は丁寧になりやすく対応していこうと自らを戒めた。

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

### 5-16

「一点は墨を使った水墨画で、もう一点は岩絵具を使った彩色画にしたい。墨といっても中国製の唐墨と日本製の和墨とがあってね、唐墨には中国清代の名墨といわれるものもあるが、僕は和墨を使っている。硯で丁寧に磨るんだよ。岩絵具とは、主に鉱石を砕いてつくる粒子状の絵具で、膠液を加えて使う。僕は天然の岩絵具の具を使っている。下のアトリエに色々あるから、手に取って見たらいいよ」と横田は語りかけるようにゆっくりと話した。肯いた真紀はコーヒーカップとソーサーをサイドテーブルに置いて、「わかりました、ありがとうございます。日本画の豆知識は多少ありますので、要点だけお願い致します。因みに、私は英一蝶や菱田春草の作品が好きです」とやや遠慮がちに言った。

銀座の一流クラブのオーナーママを、長年にわたり采配を振るってきた女の足跡を侮っていたことを改めて知らされた横田は、余計な気遣いはやめて、自然体で振る舞うことが好ましい関係を続けていける秘訣だろうと思うことにした。

専門用語だろうと業界用語だろうと斟酌などしないで使うが、作品を仕上げていく過程で、必要な言葉を真紀にかけることだけは忘れないでおこうと横田は肝に銘じた。

彼は何事にも邪魔されず、白いキャンバスに真紀の裸婦像を描きたい一心だけだった。

「英一蝶とは、洪いね！」

横田は女の選択に意表をつかれたが、それでも率直な感想を述べた。

「『朝妻船』が好きです。しだれ柳と波に浮かぶ小舟に乗る遊女の黒い下げ髪と白い水干に紅の袴の色使いと洗練された構図は、どこか儂げで品格があります」と真紀は湿り声で、横田の表情をうかがいながらそう告げた。

真紀の顔をじっと見つめていた横田は、いきなり弾かれたように立ち上がり、「そうか…、そうだ、そうだ！唇に朱墨をワンポイントで使おう。後は墨の線と濃淡とたらし込みにドラスティックな余白だ！ほら、アイデアが降ってきて墨色のコンポジションと鮮やかな紅色が浮かんできた……。これで半分は仕上がったようなもんだ。本当に一蝶様々だよ。いや、待てよ、これは貴女のお陰だ。ありがとう、ありがとう、ありがとう」と連呼しながら、真紀の手を取って、子供のように無邪気にはしゃいだ。



## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-17

男が『朝妻船』の配色と画面構成を、ほぼ正確に覚えていた引き出しの多さと自分が役立てたことの嬉しさに加え、即座に絵画二点の内の一点をブラッシュアップした神がかり的な事象に、女は異次元を体感していた。

画家の眼差しに戻った横田は、真紀の裸体のデッサンが描かれた画帳を広げて着想の糸口をつかもうと思いを巡らしていた。

「……薄絹の長襦袢を着たらどうだろう？」

横田はその角張った顔立ちに不釣り合いな笑みを浮かべて訊いた。

真紀は画家が真剣に向き合ってくれている姿勢に、少しでも応えたいと思った。

「優美でエロティックですね。長襦袢なら友禅などはいかがでしょう？」と踏み込んだ提案をした。

「……それ、いいじゃないか！」と画家は前のめりになって首肯した。

「お店の近くに専門店がありますので、よろしければ京友禅と加賀友禅を何点か借りてまいります」

「そんな店があるなら、一緒に行ったほうが話は早いんじゃないの」

「世間の目がありますので、私にお任せください。かさばる物でもないですから」

「わかった、お任せしよう。墨で描くから、色合いはこだわらないのだが、淡い藍色があったら、それもお願いしたい」

「承知しました。藍色は『朝妻船』にも効果的に使われていましたね」と真紀は調子に乗って言ってしまった。すぐに気づいて、怨めし気に横田を見ると、太い首を縦に振ってニヤついていた。

ひとまず、その後の制作過程のあれこれは端折るが、かような次第で、越前和紙に描かれた真紀の裸婦像は、横田画伯の一つの佳作『着衣のママ』として完成された。

彩色画については、横田が画道で敬愛する師と仰ぐスペイン画家フランシスコ・デ・ゴヤ作の『裸のマハ』を指標として、越前和紙に天然岩絵の具を使い、こちらは長襦袢を脱がせた作品2『裸のママ』として完成した。

二作の制作日数は、何点かの受注作品をこなしながら、延べ半年にわたった。

日本画寸法は、横田のゴヤへの異常なまでの固着もあって、手漉き和紙の職人技に頼るところが大きかったが、『裸のマハ』と同じサイズ97cm × 190cmとした。

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

### 5-18

横田が画題を《—— ママ》にしたのは、パロディではなく、ゴヤに捧げるオマージュとして名付けた。当然ながら、捧げられるゴヤに相応しいクオリティが、その作品になれば、陳腐なからかいに終わってしまう。

東京芸術大学美術学部日本画科で学んだ横田が、ゴヤと同世代で近世日本画家の一人、伊東若冲や浮世絵師の葛飾北斎ではなく、どうしてゴヤに魅せられたのか、その答えは、あのフィンセント・ファン・ゴッホの最晩年の傑作、『星月夜』や『カラスのいる麦畑』などが葛飾北斎や歌川広重の浮世絵師達の作品から大いなる特別な創造的思考を受けた事例の逆バージョンと言える。

副題に《光と影》と付けられる程の明暗のコントラストが際立っているゴヤの作品の中で、横田が特に惹かれたのは、聴覚を失った時に研ぎ澄まされた目で描かれた『カルロス四世の家族』と戦争画『プリンシペ・ビオの丘での銃殺』である。

要するに、送り手と受け手の間に均衡の取れた高いレベルが介在しなければ、この度の制作意図は茶番に終わってしまう。

『着衣のママ』と『裸のママ』は二千六年十月末に仕上がった。

「完成祝いをかねて、日本海へ越前ガニを食べにいかないか？取って置き宿を知っているんだ。近くに世話になっている越前和紙の工房があってね。今回は無理を聞いてもらったし、久しぶりに顔を出してきたいんだ」と横田はシャンパングラスを片手に、アトリエに並べられた二つの絵を見比べながら、おもむろに切り出した。

自宅マンションで遅い朝食をとってから、昨夜の売り上げなどの事務整理をしていた真紀は、横田から絵が出来上がったから見に来ないかと連絡があったので、出入りの酒屋に祝い酒用のドン・ペリニヨン・ロゼを二本届けてもらい、タクシーを呼んだ。

クラブの経営者として本業の合間に、画家から手直しの要請があれば、幾度となく可能な限り、やりくりしてモデルを務めた

完成された二つの絵画を目の当たりにした真紀は、自分がモデルであったことさえも忘れてしまうほど感動していた。

真紀は予期せぬ越前への誘いと粋な計らいに、二重の喜びを味わっていた。

「越前……、連れて行ってください！」と真紀は満面の笑みを浮かべて答えた。

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-19

越前ガニの解禁日の十二日後になる、十一月十八日土曜日の早朝に出発した。

真紀の運転するオーディィTTクーペは関越道練馬→藤岡ジャンクションで上信越道を経て上越ジャンクション→北陸道武生までのおよそ五百kmを七時間ほどかけて走破した。

横田は初めて描いた裸婦像に、画家としての確かな感触をとらえていたのか、助手席のシートにもたれて、珍しく饒舌であった。

二人の会話がしばらく途切れて、所沢を過ぎたあたりで、「淡谷のり子の裸婦像を観たことは……？」と横田は話題を変えて尋ねてきた。

「歌手の淡谷のり子さんのことですか」

「うん、ブルースの女王と呼ばれた……」

「観たことはありませんが、言われてみれば確かに、何となく聞き覚えがあります」と答えた真紀は、テレビで知っている彼女と裸婦像とが今一つしっくりこなかった。

時速百キロ越えの走行音もエンジン音も静粛性の高いオーディィTTクーペ2・0TF S Iクワトロの車内は静かで快適だった。

「彼女が音大で音楽の勉強をしていた時に、モデルのアルバイトをしていたことは？」

「思い出しました。裸婦像を描いた画家さんに強姦されたって話」と真紀は言ってしまったから、なぜか知らないけれど、気まずい思いでハンドルを握っていた。

「その画家は、芸大の先輩なんだ。と言っても時代が違うけどね」と横田は深く倒してあったリクライニングシートを起こすと、真紀の膝に手の平を添えて言った。

完成祝いを兼ねた小旅行なのに、この人は何を言おうとしているのだろうと、不快感が湧いてきた真紀は、しばらく黙り込んだ。

「そんな怖い顔をしないでくれないか。ほらほら、スピードの出しすぎだよ」と横田は諭すように話しかけた。「昭和の初めの話だから、気楽に聞いてほしいんだ。その画家・田口省吾は良家の息子でね、苦学生の彼女を経済的面で支えてやっていたし、結婚まで考えるほど惚れていたのだが、魔が差したのだろうかね、アトリエでポーズをとる彼女にいきなり襲いかかり強姦してしまったそうだ。その後五十年ほど過ぎてから、彼女が女流作家の取材に応じて、真実を明かした事により、世間に流布してしまった。これが事の顛末なんだがね、彼も適当に女遊びをしていれば、こうはならなかったと思う。その日を境に、彼女はアトリエに行かなくなったそうだ。事件の翌年から三年間、彼はパリ留学をすることになるので、よほど応えたのだろう」

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-20

横田は話しの途中で、背伸びをして小さなため息をついた。

真紀は男がひと仕事成し遂げた後の充足感と旅の解放感とが縋い交ぜとなって現れた言動の深層心理を汲み取ろうとした。

「淡谷のり子さんは、それだけ魅力があったのですね」と真紀は言って微笑んだ。

「うん、伝聞だけれど、肉厚な唇に色白の肌と肉感的な体だったようだ。当時のモノクロ写真を見ても首肯けるね」と横田は相槌を打ってから、真紀が話に乗ってきてくれたことに安堵して、話を続けた。

「画家はプロやアルバイトのヌードモデルへ時給計算で報酬を支払うが、モデルが妻や恋人や愛人なら無償の行為となるし、緊張感も違ってくる。どちらがいいかは決めかねるけれど、ゴヤ、ルノワール、モネ、マチス、ピカソなどの作品は後者なんだ。だからと言って、モデルになってくれた相手との信頼関係がなかったら、名画は生れなかったと断言できる」と横田は熱っぽく語りかけた。

「それでは、淡谷のり子さんの裸婦像は駄作ですか」と真紀は断定気味に尋ねた。

「……うん。画家がモデルと対峙する時の中途半端な距離感だろうね」と横田は歯切れの悪い返事をしてから、真紀への感謝のつもりで例え話をしたことが、よくない方へ向かっていることに気づいた。多分、現状に自己陶醉していたせいだ。

「どうかしました？」と真紀は尋ねた。彼女には男の心情が読めなかった。

「回りくどい話をしてしまったね。とにかく貴女がいなかったら、今度の処女作は考えられなかった根拠を伝えたかっただけだ」

「処女作……」と真紀は復誦した。

「僕には描けないと諦めていた裸婦像が、いろんなことがうまくフィットして描けたことだよ」と横田は気持ちを込めて言った。

「私は恋人？それとも愛人？」と真紀は無性に男を困らせたくなくて、走行中の安全を確認しながら相手の顔を覗き見して尋ねた。

「根性曲りの女だ」と男は嫌味を言ってから首を捻り伸ばして、真紀の形のいい唇の端に盗むようなキスをした。

「まあ、呆れた！運転の邪魔をしないでください」と真紀は口元を緩めて牽制した。

「そろそろ朝食にしないか」と横田はナビ画面の時計表示を見ながら言った。

嵐山PA下り線に駐車して外に出ると、朝七時の晩秋の風は冷たく二人を包んだ。

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

### 5-2 1

トイレを済ませた二人は、入り口側に設置されたベンチに座り、真紀手作りのアメリカンクラブハウスサンドを入れたバスケットと横田が淹れたコーヒーが入った保温ポットを二人の間に置いた。

真紀はひざ掛けナプキンとおしぼりタオルを横田に渡してから、バスケットの蓋を開ける。横田は慎重にコーヒーを紙コップに注いだ。二人は寒風の中で朝食をとりながら、S Aに出入りする多種多様な車や行き交う人々を何気に見ていた。

嵐山の地名に心当たりがある真紀は、数年前に嵐山カントリークラブで行われたM社主催のゴルフコンペに参加したことを思い出して、偶然のいたずらを感じとっていた。

「おっ！美味しいね。ローストチキンの代わりにローストビーフを使ったんだね！そのたびに思うのだが、料理のセンスも抜群だね。恐れ入るよ」と横田は嬉しそうに言った。

「飛び切りのコーヒーは、特別な味覚を添えて、体の芯まで温めてくれます」と真紀は両手で紙コップを持ちながら言った。

「ローストビーフとコーヒーは、我々にとって欠かせない小道具だね」と横田はひとり悦に入っている。

「赤ワインと絵筆も仲間に入れてあげてください」と真紀は悪ふざけて言った。

「あっ、忘れていた」と横田は真顔を作って同意してから笑って見せた。

「そろそろ車に戻りませんか」と真紀は相手を促した。

「うん、ちょっと体が冷えてきた。運転変わろうか」と横田は思いやりを見せる。

「大丈夫、ドライブも趣味の内ですから。いくら走っても全然疲れないの」と真紀は笑みを浮かべて答えた。

エンジンを始動させてから、「音楽を流してもいいですか」と真紀は訊いた。

「もちろんだよ。気遣いもほどほどにお願いするよ。貴女のそういった馴れ合いにならないところも好きなんだが……」

「わかりました。今日のために選曲したつもりですが、気に入ってくださるかしら？」

「ふーん。興味津々、楽しみだよ」と横田は笑って、シートベルトを締めた。

プレミアム・ツイン・ベストばら色の人生『エディット・ピアフ・ベスト』の二枚組アルバムのディスク1の中から、七曲目に収録されている『青のシャンソン』が車内に流れ始めた。

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

### 5-2 2

真紀の運転するオーディオT Tクーペはスムーズに本線へ合流して加速する。

「歌っているのは誰だっけ？聞き覚えのある声だが」とシートに深くもたれて、目を閉じていた横田は問いかけた。

「エディット・ピアフです」

「あ、そっかあ……言われてみれば、そうだね。『愛の賛歌』なら聴いたことがある。この曲は？」

「『青のシャンソン』という曲です。あまり知られていませんが、恋多きピアフが一番愛した男と言われている、ボクシングミドル級世界チャンピオンへ捧げたレクイエムです。彼女のせいで、飛行機事故に遭遇して亡くなってしまった話は有名です。彼の死を契機に、彼女の人生観や歌の方向性も変わってしまったそうです」と真紀は丁寧に説明した。

横田は瞑想者のように黙っていた。

「聞いていますか？」と尋ねた真紀は、話が独善的になり過ぎたのかしらと、にわかには不安がよぎり、横田の返事を待つこともなく、曲が終りに近づいているのもかまわずに、何を思ったかアルバムの五番目に収録されている『愛の賛歌』へ曲目を切り替えていた。

真紀はじんわりと背筋に冷や汗が出てくるのを感じながら、「選曲ミスかも、選曲ミスかも」と心の中で反復していた。

「ピアフか、痛いほどのバラードだ！狭い空間で聴いているせいか、説得力のある歌声で迫ってくる。この車は音楽が鮮やかに聞こえるね。静かでいいよ」と横田は不自然に曲目が変わったことも意に介さず感動している。

真紀は杞憂に過ぎなかったことにほっとしながら、ハンドルを強く握っていた手を緩めていた。

今度の小旅行の機会を捉えて、『青のシャンソン』を糸口に、ある思惑が真紀にはあったのだけれど、小賢しい女の浅智恵かもしれないと少し心が揺れていた。

「シャンソン歌手だったら、僕はシャルル・アズナヴールだな。『イザベル』や『忘れじの面影(彼女)』などは、仕事中に流したこともあるが、やはりクラシックが多いね。まっ、音楽は仕事に興が乗った時に限るが……。アトリエのオーディオの脇にCDラックがあるよね。僕の好みも知っておいて欲しいな」と横田は言って悪戯っぽい目を見せた。

後ろから来た黒のトヨタ・ハリアーが、しなやかに追い越して行った。何故かその瑣末な一瞬のスピードが真紀の背中を押した。

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

### 5-23

「どんなラインアップか、漁っておきます」と真紀はことさら軽口をたたいて自身の緊張をほぐしてから、「少し迷いましたが、思い切って言ってしまうます」と硬い表情を浮かべて語り始めた。

秋の日差しを受けてフロントガラスの底がきらりと光った。

「聞いていられなくなったら、いつでもストップをかけてください。ご存じでしょうが……パブロ・ピカソの《青の時代》と呼ばれる三年間への契機は、かけがえのない親友の悲恋による自殺が一要因とされています。その時に描かれた作品、『死せるカサヘマス』は、死、苦悩、絶望などが、もの悲しく、哀愁を帯びて表現されています。そこで、先ほど聞いて頂いたピアフの『青のシャンソン』……」と言いかけた時に、助手席から特別な何かの気配を察した真紀は、話を途中で断念せざるを得なくなった。

走行音だけの中で、しばらく沈黙があってから、「そのまま続けて」と横田が促した。

真紀は水分を補給したい気持ちを押さえていた。横田の微妙な反応を読み解いて、正解に近い確信を素早く得ると、またしゃべり始めた。

「……『青のシャンソン』と《青の時代》を結びつけるのは、プルシャンブルーにかこつけた言葉遊びなんかではありません。最愛の人の事故死や大親友の自殺によって、二人の天才が残した青色に纏わる二十世紀の芸術遺産の事です。男女の違い、死因の違いこそありますが、愛の普遍性を求め続けた壮烈な姿勢に強く惹かれます。『青のシャンソン』を選曲した訳は、今度の制作過程で、ショパンの『バラード第一番』やナパバレーワインの『オーパス・ワン』や、そのほかモデルにしても、たくさん楽しませてくださったことへの、私なりのささやかな企みだと受け止めてください」

話し終えた真紀は、果して自分の思いを理解してもらえたのだろうか、と、運転上の都合でバックミラーを操作しているように見せかけて、鏡に映る横田の顔を盗み見た瞬間、目と目が合ってしまった。

「よそ見をしてちゃ危ないよ」と横田は薄笑いを浮かべて注意した。

真紀は慌ててバックミラーをもとに戻してから、気恥ずかしさに顔をしかめた。

「ささやかな企み……？それとも貴女の空想……？どうせなら、四の五の言わずに、ピアフの歌を聴かせてもらったほうが良かったかな。生兵法は大怪我のもとだよ」と横田は露骨に嫌味を言った。

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-24

『青のシャンソン』歌詞の意識の一部

ジュリエット・グレコ版

私は瞳を青くしてもかまわない  
どうして欲しいか話してちょうだい  
あなたのお望みのままにするわ  
十八歳だって二十歳だって三十歳だって  
なんなら白髪になってもかまわない  
お城のお姫様にだって場末の女にだって  
何でもできる私と何でもできない私  
汚れた街を売春婦のように彷徨う私  
あなたの夜をちょうだい  
あなたのベッドの傍らで眠りたい

真紀の肩口がピクッと動いた。車内には、『道化師万歳』の曲が流れていた。

「私の企みは、単なる妄想癖と言うことで一蹴されてしまったようですね」と真紀は冷やかな笑いを浮かべて言った。

「そんなことはないさ、しかし、いい歌はじっくり聴かせてもらいたい。貴女の気持ちは分からないでもないが、話の展開に多少の無理があると思う。今気づいたんだが、僕も貴女も、気持ちの伝え方にアカデミック過ぎるきらいがあるね。アカデミックと言えば聞こえはいいが、自戒の念を込めて言っているんだ。それに地口落ちは、噺家に任せておけばいいんだよ」と横田は論ずるように言った。

銀座のクラブママとして政界の重鎮や経済界の大物や各ジャンルの有名アーティストなどに鼻根にされ、長年にわたり、それ相応の体を張ってきた真紀にしてみれば、横田ごときの扱い方は然もないことのはずだが、古今東西、とかく男と女の恋愛はままならない。

またしてもロシアの文豪の登場となるが、レフ・トルストイの長編小説『アンナ・カレーナ』のストーリーは好例と言える。

帝政ロシア時代の話で、政府高官の美貌の妻と青年将校との許されぬ愛を縦糸に、農業改革に取り組む荘園主の純愛を横糸にして繰り広げられる二つの愛に対する考え方をテーマにした物語となっている。

長編にもかかわらず、プロットは平明で、一気に読み進めていける。

筆者も見習いたいと念じているのだが、なかなか思うようにはいかない。

文豪の晩年は、妻との確執に悩まされ家出した挙句に、乗り込んだ列車内で発病して、小駅の駅長室で肺炎のため死去する。

この話は、『終着駅トルストイ最後の旅』として映画化された。



## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

### 5-25

旅情を台無しにしたくなかった真紀は、横田の言い分に反論したい気持ちを押さえて、平静を装っていた。

北陸道の有磯海サービスエリアで遅い昼食を済ませてから二時間ほどで、武生インターチェンジを降りたアウディTTクーペは越前市街に入り、やがて越前和紙の里として名高い五箇地区の風情漂う町並みの中をスロウダウンして走行する。

川幅が一問程の川沿いに続く数百メートルの間に、江戸時代後期から営々と営まれる和紙工房が点在していた。

横田の指示に従い、そのうちでも特に趣のある建て構えの製紙所の駐車スペースに車を止めた。

ロングヘアをざっくりした編み込みで小顔ヘアアレンジして、エンジ色のタートルネック・ニット・セーターにブルージーンズと白いスニーカー、黒のテーラードジャケット姿で車から降りた真紀の鼻先を、和紙作りの作業工程から生じる独特な匂いがかすめた。

すぐに工房の入り口から、中年の小柄ではあるが一体がっしりとした体つきの五代目当主が出てきて歓迎の意を表した。

横田は特注サイズの礼を言ってから、真紀のことを大切な友人として紹介した。

和紙のサイズは、紙漉きの道具である漉簀や桁の大きさによって決まる。道具の大きさは、漉き手の工夫や技術で様々なサイズが可能となる。

初めてと言う真紀のために、工房内を案内してもらい、紙漉きの実演を見せてもらった真紀は、当主の体躯の所以が分かった。

応接室に通された横田はワインレッドのダウンジャケットを脱ぐと、持ってきた裸婦画を写したA4サイズの紙焼き写真二枚をテーブルに並べて、「写真で失礼ですが、お陰さまで、こんな感じの作品になりました」と五代目に報告した。

写真を見入っていた五代目は、「ほお、裸婦画でしたか！」と以外そうな顔をして目を細めると、「あくまで写真から受ける印象ですが、二作とも和紙を生かし切っていると思います。しかし裸婦とは予想外でした……。ある意味では、横田先生の処女作と言っても過言ではありませんね。ぜひ、実物にもお目にかかりたい！」としきりに誉める。

五代目の評価に感動してウルウルする真紀は、高揚した顔で横田の様子をうかがった。

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-26

横田は出されていたお茶を一口すすってから、真紀に微笑み返すと頷いて見せた。

「絹本にするか紙本にするか、正直言って迷ったんですが、紙にして正解でした。胡粉の塗り具合からして、最高の紙を漉いてくれました」と横田は五代目に頭を下げた。

「注文を受けた時は、変則サイズだなと思いましたが、先生には時折、驚かされます」とI氏は親しみを込めて言った。

「実を言うと、怖くて、オリジナルは持って来られませんでした」と横田はよほど嬉しかったのか、そう言って本音を漏らした。

提携関係にある画商の朝倉の所感も聞いてみたかったのだが、彼の美術上の戦略から推して、いち早く東京画壇の間に流布されるのも面倒だったので、日本画に一家言を持っている越前のI氏を、信頼できる無色の立場の目利きとして、最初に選んだ。

「新境地を開きましたね、先生。私は水墨画のほうが好きです。着衣の下から匂い立ってくる独特のエロティシズムが新鮮だし、なんと言っても、聖なる光を纏っているのがすごい！」と五代目は褒め言葉を重ねながら、裸婦像のモデルは紛れもなく目の前にいるチャーミングな女だと、いち早く見抜いていたが、そんな素振りも見せずに、「大事なことを忘れていました。『こぼせ』の予約を入れておきました」と話題を変えた。

「ありがとうございます。Iさんが頼んでくれると、何かと助かるんです」と横田は礼を言った。

I製紙所を辞すると、三十分余りかけて越前町梅浦。若狭湾の波打ち際にある宿『こぼせ』に到着した。波打ち際と言っても、コンクリート護岸になっている。

四階建て十四部屋のこじんまりした『こぼせ』は、「創業明治三年、ステキな夕日に出会える海辺の宿」を宣伝文にしているが、やはり十一月に解禁となる越前ガニが売りだ。

作家の開高健が晩年まで越前ガニを食しに定宿として利用したことで知られている。若狭湾を一望できる三階の角部屋に通された横田は、「この部屋、この部屋。繁忙期に二人だけで泊る贅沢ができるのは、なんとってI氏のお陰だ」と満面に笑みを浮かべて真紀に自慢する。

十一月十八日土曜日午後四時過ぎの若狭湾は、曇り空の下に鉛色の穏やかな海が広がっていた。

裸婦像が高い評価を得たこともあって、上機嫌な横田はチェックインも早々に、「貴女もひとつ風呂あびるといいよ」と言い残し、四階にある男性大浴場に行った。

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

### 5-27

着替えなど荷物を整理し終わると、真紀は部屋に鍵もかけずに女性大浴場に向かった。

湯船に体をゆっくりと沈めた真紀は、黄昏ゆく眼前の情景に目を細めた。

運転の疲れはなかったが、道中のやり取りや和紙工房での思わぬ出来事に精神的なストレスを感じていた。

横田が五代目のI氏に裸婦像の美術批評を託したくんだり、真紀には初耳だったし、写真を用意していたことすら知らなかった。

越前ガニを賞味するついでに和紙工房を表敬訪問するとばかり思っていた真紀は、意外な経緯に狼狽させられたし、クラブのママ以上でもママ以下でもない、男のまさかの距離感に悄然とするしかなかった。

I氏の高評価に感傷的になってしまった上滑りな振る舞いも含め、自省と悔しさと切なさでこぼれる涙を拭うように、女は長い黒髪をいつもより時間をかけて洗うと、鏡に映る顔に自嘲気味に笑いかけた。

真紀は気分転換を図るために、館内に展示されていた開高健の写真や色紙から、愛読したことのある何冊かの小説を想起していた。

つるべ落としの海景に漁火が見えている。

大樹の銀杏散るキャンパスで語り合っていた頃の青春が見えてくる。

一昔以上前の記憶を辿っていくと、数冊の作品の中から、旧西ベルリンに滞在中の主人公の中年作家が、昔の女の下宿先に転がり込んで怠惰な日常を送りセックスに溺れた果てに、ヴェトナム戦争の取材に人間回復を賭けようと旅に出るストーリーの題名『夏の闇』が、フラッシュバックのように蘇った。

アメリカ軍の中隊に同行させてもらい、激戦地のメコンデルタで生死の境界をさまよう体験をしながら、悪あがきと倦怠とエンドレスの殺戮の逃げ場のない暗闇で自己矛盾に陥る日々。

定宿にしているサイゴン(現ホーチミ市)のホテルのバーで、一見頼りないバーテンダーが作るドライマティーニの意外な切れ味に疲弊しきった魂を洗浄する一文。

精神的ストレスを女と戦場に委ねる男のむき出しなエゴ思考を、彼独自の文体で芸術の域に達せさせる力量は認めるとしても、繰り返しになるが、ある意味で上層階級の顧客を大勢相手にしてきた真紀にしてみれば、正味のところ、開高健といえども所詮は系列ごとに色分けされた範疇に属する男の内の一の一人として見なすこともできた。

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-28

くどいようだが、たとえ真紀ほどの女であっても、「恋は盲目」の呪縛を解くことはできない。

アメリカの作家カート・ヴォネガットに言わせれば、「恋(人生)なんて、そんなものさー」と一笑にふすことだろう。

幾度となく真紀は、練達の恋の魔術師と浮き名を流されてきたが、現にいくつかの恋を顧みれば、前にも述べたように、店の顧客のハードボイルド作家に言わしめた喩え話。

四百字詰め原稿用紙で四十数枚の小品、チェーホフ作『可愛い女』の主人公オーレンカを文豪トルストイにして「無償の愛、夫や恋人の見解をその都度、自分に同化させ、一日として愛情なしには生きられない神にも似た女」と絶賛させた。

ここでも二大女優のメリナ・メルクーリとドリス・デイと同様に再度登場させた二大作家のアントンチェーホフとレフ・トルストイとがリンクすることになる。

無償の愛とは言わないまでも、真紀にもそれなりの自負はあつた。

主人公オーレンカのように愛した人との死に別れはなかつたけれど、後腐れのない決別はしてきたつもりだ。後に死別を経験することになるのだが.....。

曇天ゆえに漆黒の闇に浮かぶ漁火が幻想的に見えて、真紀は独り占めしている湯船と湾とが同化するイリュージョンに誘われた。

沖へ向かって泳ぎ始めた真紀の気魂は、ひりひりして制御不能に陥りそうだった。

真紀は心底から、ドライマティーニを飲みたい！と渴望していた。

ドライマティーニは、何度か出口が見えなくなった時、『こはる』へ出勤前に馴染みのバーで作ってもらったカクテルだ。ドライマティーニが開高健作『夏の闇』の一場面をも誘引した。

それにしても、記憶や想いの断片が次から次へと鎖状に連なっていく様を、真紀はどう捉えていけば良いのだろうか……、横田に指摘された空想癖の所為かも……と精神の境界をかく乱させられる。

まもなく真紀は、それは独特のオーラを漂わせる横田の波長と越前町梅浦という場所のためだと気づかされた。

真紀が客室に戻ると横田は苦笑して、「溺れているんじゃないかと心配したよ。もう少しで女風呂を覗きに行っていたよ」と嫌味を言いながら、ワインクーラーから白ワインを取り出して抜栓した。

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-29

真紀が急いで身づくろいを整い終えると横田は白ワインを二つのバルーン型ワイングラスに適量を注ぎ、「お疲れ！」と労いの言葉をかけてグラスを掲げてからひと口飲んだ。

「五代目が差し入れしてくれていたそうだ。お礼の電話はしておいたが、いらぬ気遣いをさせてしまった。シャブリ・グラン・クリューのレ・クロの2003年を2本」と横田はフランス東部ブルゴーニュ地方特産の白ワインのラベルを見て言い添えると満更でもなさそうな顔を作り、「料理をお願いします」と客室電話で頼んだ。

幾度となく銀座で旬の越前ガニを食したことがある真紀も、『こばせ』と言う特定の宿で食べなかったならば、自分の店のお客との話題に上った時に越前ガニを味わったことがあるとは、決して口にはできなかつただろうと思知らされた。

真紀の味覚は開高健がそのエッセイ集の中で表した美味、妙味、魔味が滴り落ちる真髓で支配された。

男と女は大皿に盛られたカニの洗いや茹でガニをただただひたすらに食べた。言葉など必要なかった。男は2本のシャブリが空になると、客室電話でやり取りして、地酒をルームサービスさせた。

使用済みそのままの二つのワイングラスに黒龍酒造の大吟醸(4合瓶)を注いで、ひと口飲んだ横田は、「五代目には悪いが、地酒のほうがベストマッチングだね」とさりげなく言うと、実証するかのように茹でガニにかぶりついた。

真紀と自分との酒量の許容範囲をわきまえている横田は、最後に大吟醸をもう一本追加注文した。

溢れるほどの豊穡感に満たされた男と女には、セックスの介在する余地はなかった。

真紀は横田の寝息を聞きながら、かつて経験したことのない精神バランスに入り込んでいた。

閉じたまぶたの内側に何の形か分からないおぼろげな蜃気楼が浮かんでいた。富山湾の蜃気楼は有名だが若狭湾でも見られるのだろうか、それも季節外れとして違いなはずの現象が真紀を悩ませている。

真紀は脳内にチェス盤を置くことで、得体の知れない蜃気楼を追いやった。

中学に入ったばかりの頃に、初めて父に勝った棋譜を脳内チェス盤上で動かしていた。